大光寺遺跡報告書

魚津市教育委員会

大光寺遺跡発掘調査報告書

序

魚津市大光寺から非常に珍らしい土器が出土した。それは新潟県長岡市馬高（まだか）から出土する土器で、馬高式と称され、その口辺部の装飾が火焔に似ているところから、火焔土器の名でも広く知られている、その土器である。これは魚津市内においてこれまで発掘調査された桜峠や天神山遺跡において見られなかったばかりではなく、富山県内の何れの遺跡においてもみられなかったもので、東北系文化（大木 8a 並に b）の南西下が越中にまで及んでいたことを示す唯一の資料であった。このことが契機となって大光寺遺跡の発掘調査が要求されたのであったが、たまたま同遺跡地の所有者石川作造氏が基ばん整備されるのを機会に魚津市立西部中学の歴史クラブの生徒によって試掘され、ここ大光寺独特の土器の存在することが明らかにされたのは、昭和41年のことであった。ついで昭和42年3月さらに石川氏が基ばん整備をされるに先だって、魚津市教育委員会の手によって発掘調査を行ったのである。なおこの報告書では41年並びに42年両年の遺物についてまとめてしるすこととする。

1. 遺跡の概観

富山市方面から国道8号線によって魚津市へ入ると、早月川を経てまず渡る小さな流れそれは角川（かどがわ）である。その角川が魚津市松倉の鹿熊（かくま）の奥の深谷に源を発し、松倉地区、下中島地区を深くえぐりながら流れて来て町なみの見えるところ　そこが大光寺部落である。

遺跡は角川の東側（写真1，附図1参照）洪積層台地がなだらかに降下し、まさに沖積層平野に没しようとする小坂丘上にある。電鉄魚津駅から東南徒歩約20分、海抜15～20mであって、角川によって造られた河成段丘であろう。眺望絶佳で魚津市街地の屋並を眼下に眺め、その屋並を越えて魚津の海が指顧の間に望まれる。角川での漁撈、野方台地大谷山、松倉方面の山々は、鳥や獣の狩猟、山菜の採集など、彼らの生活資源は十分得られたことであろう。

遺跡の範囲については確かなことはいいがたい。かなり広い範囲が考えられるが、現在のところ約200m四方あたりから採集されているに過ぎない。この範囲は大部分が水田で、一部梨畑といった地点である。今回の発掘調査は大光寺出戸600番地石川作造氏の水田3カ所で、なおそれに隣接する大村悦雄氏の梨畑において表面採集をおこなった。

魚津市の縄文式文化時代の遺跡は、布施川、片貝川、角川及び早月川流域にみられる。このことは彼らは漁撈に依存していたことを物語る。大光寺は片貝川と角川に囲まれる野方台地の末端に存在するのであるが、彼らの漁撈の場として片貝川は考えられない。なおこの野方台地のうちでは石垣遺跡八蓮谷（やちんたん）遺跡（共に後晩期）が知られており、これらの遺跡の東方2～3Kmあたりの石垣平のうちにも遺跡の存在が考えられている。

（注　昭和43年夏休み中石垣平において土器片が表面採集されている）

2. 調査の経過

調査は序文において述べたように魚津市教育委員会が主体となって昭和41年 42年の2回にわたっておこなわれた。41年では魚津市立西部中学校正史クラブ（顧問能登幸太郎先生、部長清水克彦君）の手で、大谷清瑞教育委員、広田寿三郎西布施小学校長（現道下小学校長）の参加を得 同年3月28日石川作造氏の水田中1カ所の調査を試みた。

昭和42年は3月25日 26日の両日 魚津市立西部中学生26名（顧問能登先生）富山県立魚津高校生9名（顧問金尾先生）高岡工芸高校生及びその O.B. 4名（顧問小島俊彰先生）らの手によってA・B・C 3ケ所（写真1）において発掘調査をおこなった。調査は小島俊彰先生の指導により、富山県考古学会会長湊晨氏及び県考古学会会員ら、西布施小学校長広田寿三郎先生、魚津市教育委員大谷清瑞氏、同委員会社会教育課長菅原氏、同岡崎指導主事、大村、黒田両職員が参加した。

Aトレンチは魚津高校及び高岡工芸高校、B・Cトレンチは西部中学の担当で各々2m×6mをトレンチした。（附図1）

発掘は、表土（耕土、肥沃な黒土腐土）約20cmを剥離すると、黒褐色又は赤褐色土で、この辺りからぽつぽつ土器片や石片が見られる。埋蔵場所は深さA・B・Cとも30～50～60cmであった。土質は腐植土のまじった褐色土で、ここが当時の主な生活地ばんと推定された。出土層は単層である。上下二層らしい所もあったがこの層間には年代的異層が認められなかった。

Aトレンチでは1m、B・Cトレンチでは80cmでローム層に達した。これは水田構成の過程においてAとB・C間に約20cmの落差があり、基ばんには断層のなかったことを物語ってくれた。

出土品は主として土器であり、その出土量は極めて豊富であり、完形のままで出土したもの（写真5・6）、更に多くの復原可能の土器が出土し、縄文式文化の最盛期を予想せしめた。石器類は比較的少なかった

が、これは水田遺跡の特徴であろうか。水田耕作では人馬を傷けないために、注意深く石片が取り除かれねばならない。このために魚津市内の何処の遺跡についても水田遺跡では石器の出土は少ない。しかし附近の小川や用排水を探ると石斧や石錘の捨てられているのをみる。

基ばん近くにいたって自然石が発見されたが人為的配置が確認されなかった。多くは花崗石と砂岩であった。なおその他の自然遺物は発見されなかった。

Aトレンチにおいて炉址が発見された（附図3　写真3）。さらに基ばんを洗って2箇の柱穴らしいものを発見したが日没となったので作業を中止した。しかもこの発見は26日の事で、住居址の存在を予想しながらも今回の作業は26日を以って一応は終ることとしたのでその全貌を明らかにすることが出来なかった。

3. 遺物の報告

A. 自然遺物

自然遺物としては特に注目に価するものは発見されなかった。（自然石が可なり多く、長径30～40cm程の枕型や楕円形の物が多く、人為的配置に関心を持たれたが、その構造等が確認されなかった。石質は花崗岩並びに砂岩が多く、おそらく角川において採集したものであろう。炭化物の破片が各地に散在していた。炉址と柱穴2箇が発見され、住居址の存在が予想されたが、時間的にその全貌をあきらかにする余ゆうのなかったことは全く残念であった。炉址については後記する。

B. 石　器

先にも述べた如く、水田遺跡では石器の出土は比較的少ない。それは水田耕作に際して石片は人馬を傷つける恐れの多いところから、これを念いりに除去するからであろう。それでもなお打製、半打製

磨製石斧や石錘及び軽石製の浮子（うき。完全形1箇　破片数箇
写真4及び石器（二）の11）並びに7cmばかりの石槍1本が出土
している。（写真 石器（一）・（二））

1. 石斧　打製石斧
　　完形　5点　Aトレンチ　2点
　　Cトレンチ　3点
　　欠　4点　A.　3点
　　C.　1点
　　半打製石斧
　　完形　7点　A.　2点
　　C.　3点
　　不明　2点
　　欠　1点　C.
　　磨製石斧　完形　1点　A.
　　欠　4点　A.　2点
　　C.　2点
2. 叩石　7点　内凹石　4点　C.　2点
　　不明　2点
　　凹石と石錘をかねたもの　1点
3. 石錘　2点　B.　2点
4. 浮子（軽石製）　完形　1点　小片　5片　何れもA.
5. 石槍　1点
6. 疑問石器　1点　貫孔がある。人工的と思われるが用途不明。
7. 砥石　6点　A.　1点
　　B.　2点　内1点凹がある。
　　C.　2点
　　不明　1点　凹がある。

備考，詳しくは、写真で見ていただきたい。

C. 土 器

本遺跡の発掘は小範囲で而も短時日ながら出土した土器は非常に多く、縄文式文化の最盛期を思わせるものがあった。出土土器の主体は縄文式文化時代中期の中葉以後のものである。完形に復原し得たものが10点（写真13～22）これに準ずるものが1点あった。（注、石膏などの補充によって復原可能と思われるものがなお数点ある）本遺跡の出土品はこれまで魚津市のどの遺跡からも出土しなかった馬高式土器や大木（だいぎ）86などの東北系や石川県古府（こぶ）式系のものが中心をなしていることに意義がある。天神山式土器に類する土器も出土している。この時代の施文具の主体をなしたものは半截竹管であったからそれは当然のことであるが、それにもかかわらず天神山とは異ったニュアンスの感じられることは、天神山時代との時間的相異を物語るものであろうか。

以下古い時代に属すると推定されるものから順を追って分類し、出土土器の紹介をおこのうこととする。

第一群土器（前期末から中期初頭）

写真31のa及びCの羽状縄文片の胎土に繊維がふくまれているから中新川郡極楽寺遺跡から出土したものに類するもので前期のものである。同じくeの撚糸文は前期末か或は中期初頭の撚糸文である。

写真23の蓮華文は写真27のB字文（横子文）と共に中期初頭の新崎（にんざき）式に類する。蓮華文とB字文を別々に扱ったが、天神山出土では口頸部を蓮華文で取りまき、胴部にB字文のみられる土器がある。写真25はここに扱うべきでないかもしれないが、蓮華文の変形として扱った。写真26鋸歯文並に沈刻は天神山式C類及びd類である。半隆起線の根元を連続刺突して鋸歯状の文を施したり、半截竹管の脊で連続刺突して沈刻の味を出している。

写真28、29、30は地文の縄文を残して半截竹管による平行沈線文を施している。

第二群 土器（天神山式土器系）

天神山式土器は新潟県長者ヶ原と同様中期縄文式文化の前葉期で平行沈線の曲線文の華やかな土器である。平行沈線は半截竹管によって画かれる。この沈線の基線は、はりつけた粘土、紐であって太い隆起線をなし、この隆起線にそって半截竹管文が画かれる。なお、はりつけた隆起線上を半截竹管で連続刺突すれば爪型文が出来、篦様の工具で刺突すれば爪型文に似た文が出来る。天神山式では前者をa類連続爪型文とし、後者をb類擬連続爪型文とされている。天神山のb類では写真35のe右下隅にみられる施文が爪型文に擬った形であったところから擬連続爪型文と名づけた。

大光寺における写真32のb、33のdにみられるように、はりつけた粘土紐の隆起線の技巧が極めて進歩して来る。天神山ではこの線は半円形で滑らかさを持っていたが、大光寺では隆起線の脊をうすくつまみ上げたような感じを与えている。このような技巧の進歩は天神山より時代が下ることを予想せしめる。

b類土器では文の主体は渦巻である。写真34～36がそれを示してくれる。篦による連続刺突の施された渦もあり、34のc右辺にみられるように刺突文のない渦もある。しかしこの類の土器では何処かに連続刺突文がみられる。

写真37以下40は半截竹管を施文具とした平行沈線文（半隆起線文）である。天神山式e類に当る。b類の渦巻文と写真37にみられる渦巻文と比較して見るとよく分るように後者には連続刺突文がみられない。写真37下段左から2番目は同心円である。この同心円は注目に価する。同じく写真37では渦巻文のくずれたような文がみうけられるがこれらも施文の進歩を物語るものでなかろうか。写真39のa、eは同一土器である。この曲線の美しい流れは近代的感覚を与える。

第二群土器では写真15.16の擬連続爪型文と写真17の隆起線文の3点の完形復原土器の出土をみた。

第三郡土器

大光寺遺跡をして最も特色あらしめているのはこのグループである。この遺跡が脚光を浴びたのは馬高式土器の発見にあった。それを契機に調査発掘が行なわれたのであるが、馬高式としては2個の破片の出土をみたに過ぎなかった。しかし大木（だいぎ）8b式や古府式土器の出土によって、大光寺遺跡は中期縄文式文化時代の最盛期の遺跡であることが明らかにされた。

新潟県長岡市馬高（まだか）から出土するので馬高式土器の名がある。口辺部の鶏頭に似た飾が火焔のようにみられるので火焔土器の名でもしられている。この土器の分布は新潟県と長野県の県境中魚沼郡津南町付近までと考えられていたのであるが、越の国の西北部富山県下まで延びていたことが明らかにされた貴重な資料である。写真13の土器は黒部市の佐度忠作氏（故人）と大谷清瑞氏（魚津市教育委員）の手によって復原されたものである。1966年魚津市立西部中学校歴史クラブ員の試掘ではこの土器に類するものが全く発見されなかったが、1967年の発掘では2個の破片が発見された。

写真19、20の大木8b式は、これまではせいぜい新潟県長岡市まで分布していると考えられていたが、富山県の魚津市で発見されたということは極めて貴重な発見であった。この2個の土器は共に地文に縄文を施しその上に粘土紐をはりつけ、更にその紐の上を半截竹管の脊で押して曲線文を画いている。写真19は岩手県繋から出土している甕棺に似ているが大光寺のそれは甕棺ではないであろう。しかし作製の手法は全く同一といっていい。写真20はキャリッパー型土器といわれている。

東北地方において出土したこの形式の土器には口頭に小貫孔があり、

澱粉などの保存食の貯蔵用に供せられたと考えられている。
甕式土器について今一つ述べておかねばならぬことがある。それは甕の甕棺から考えられるのは中国大陸の南部浙江省あたりの風習である洗骨埋葬用に用いられたということである。

写真21は古府式土器といっている。東北大木8b式ともいい得るであろうが石川県古府から出土する土器により以上近い為に古府式とした。完形品の外に5点の口縁部破片が出土しているが、それによれば何れも波状口辺であることがしられる。口縁部の半隆起線の曲線は渦巻の退嬰化したもので、中期の後半を推定させる。地文には縄文がみられる。口縁部が外傾し、胴部がふくらんで器形が〔くの字形〕（ ）をとるのも古府式の特徴の一つである。

写真18の完形品並びに41～42を櫛目刺突文と名づけた。第二群擬連続爪型文の類形であろうか。はりつけた粘土紐の上を櫛状の工具で連続刺突して文を施したものである。天神山出土品では擬連続爪型文の工具が篦からアナダラ貝へと移ったようである。そして後期遺跡と考えられる魚津市東尾崎ではこの貝殻文が出土品の主体をなしている。　この文は串田新（くしだしん）遺物の特色をなすものなので串田新式といっている。串田新は縄文式時代の中期末葉であるから、篦から貝殻に移行する中間に櫛目刺突が存在したのかもしれない。しかしこの土器は魚津市内では今のところ大光寺にだけしか出土していない。そして大光寺では貝殻文が出土していない。

写真42は平鉢（浅鉢）の破片であってこれはほぼ復原可能である。口縁部の文は櫛目刺突と考えられるのでこの類に入れた。

第四郡土器（縄文及び無文）

縄文土器は何れの遺跡でも最も多く出土するのであるが完形品はほとんどない。しかし大光寺ではすばらしい完形品が2点出土している。写真14はその一つである。あとの一つは高さ21cm、口径23.3cm、底14.5cmの円筒形土器である。写真aは水平口辺に2個の突起がみられる。このグループには斜縄のみを扱った。羽状縄文や撚糸文はすでに紹介した通りであるが、キメリッパー型土器の地文の縄文は撚糸文である。したがって撚糸文としても新らしい時代のものもある。

写真22の無文土器は小形の愛らしい土器である。口頸に9個の小貫孔がある。この貫孔は器の中に貯蔵されたものが乾燥し易いようにするためにあけられたものでなかろうかと考えられている。したがってこの小器には何か乾燥されることを必要とするものが蓄えられていたものであろうか。

中部地方高地に現られる首利式土器が1点出土している。上半のみであるが、器面全体を縦の条線で埋め、一定間隔をとって4本の細い平行沈線の波状文が施されている。

ま　と　め

土器の分類については異論もあることと思う。ここでは出来るだけ魚津市内の他の遺跡の出土品と対比して述べて来た。天神山式という形式は学界における形式とはいえないが、魚津市内としては最初に調査発掘をおこなった所なので魚津市内の遺物は全て天神山式を参考とした方がよいのでなかろうか。大光寺土器の中心をなすものは雪高や大木8bの東北形や、石川県古府式土器であって完形に復原出来た土器もこれらが主であった。櫛目の刺突文は現在のところ魚津市内では

大光寺の他（ほか）、何処からも出土していない。宇奈月町内山（うちやま）の出土品の中に同形式のものがある。若しも両遺跡の遺物を対比することが出来れば何か得るところがあるであろう。

連続爪型文、擬連続爪型文、鋸歯文、沈刻、隆起線文など何れも天神山桜峠遺跡から出土するものであるが、だからといって天神山や大光寺と関連性を持たせることは考えものである。むしろ舟川に魚捞資源を持ったのでなかろうかと想像される早月上野と何らか関連性を持ってもよかりそうなのに、今はそれを確める程には調査研究がなされていない。

炉 址（住 居 址）

Aトレンチの基ばん赤色ローム状土から炉址が発見された。長径、110cm、短径80cmのほぼ楕円形で、22個の自然石（主として花崗岩）で囲まれ、中は掘り凹め、土は真赤に焼けていた（写真3）。灰、木灰も多く、微量ながら骨片らしきものも認められた。炉の周辺及び炉を覆っていた黒褐色の柔らかい土中にも炭化物破片が多くみられた。炉のたき口であろうか長径側の南方の隅が少々空いていた。基ばんの赤土はふみかためられ、その辺りから土器の破片、石斧、軽石（写真4）などが出土した。更に炉の北方130cmの所に柱穴（深さ40cm、直径30×34cm）、炉の西方150cmの所で18cmの深さ、直径32×24cmの柱穴を発見した。日没になり、更に地主側の農作の都合などもあってそれ以上の追及の出来なかったことは残念であった。しかし、この2個の柱穴によってそれが住居址であったことが推定された。（附図——4——参照）

結　語

これまで折にふれてこの遺跡の特質について述べて来たので改めていうべき結語とてないのであるが、今少しつけ加えておきたい。

現在の遺跡からは海岸まで徒歩でほぼ20分である、また遺跡からは海が手にとるように見える。このような現状からすると大光寺では海での漁撈が想定されるが、それには次の事を考え合わせねばならない。魚津市の埋没林は放射性炭素C14の測定の結果ほぼ紀元0年と推定される。即ち大光寺文化時代は現在の海は陸地であったのである。したがって彼らの漁場は恐らく角川であろう。角川もここ数年でずいぶん変貌した。非常に深い川であった。この川での漁撈ではたとえ網漁にしても大きい石錘や浮子を必要としたのではなかろうか。

此の度の発掘では石槍が一点出土しただけで、狩猟を裏づける石鏃が発見されていないが、広い野方台地から考えて狩猟がなかったとは考えられない。

本遺跡は海抜15～20mという小高い丘陵上に存在するのであるが高地乾燥地帯であって、しかも見はらしがいいということは中期遺跡の条件にかなっているというべきである。やがて低湿地帯へと民族移動がなされるのであるが、それは何処であったろうか。石垣や八蓮谷（やちんたん）埋没林などは後晩期遺跡なのであるが、これらと大光寺とどんな関連を持つのであるかは明らかにしがたい。また魚津市内の他の遺跡との関連性を見出しかねる特異の遺物を持った遺跡として今後更に研究が進められねばならぬであろう。少くとも今まで考古学界で考えられていなかった東北系文化を所有していたというだけでも重要な遺跡である。この文化の流入が如何にしてなされたか、さらに新川地区に、このような大光寺式文化が他にもみられないであろうかなど研究されねばならない。

水田遺跡の発掘は農耕作者には非常に迷惑をかけることになる。この点地主石川氏の協力に感謝の意を表したい。

最後に、発掘指導並びに遺物整理に指導助言を与えて下さった高岡工芸高校小島先生や、県考古学会会長湊晨氏、広田寿三郎先生、大谷市教育委員、魚津高校正史クラブの協力にも感謝する次第である。ことに特筆しておかねばならぬのは、魚津市立西部中学校正史クラブの活躍である。顧問能登先生のもとにおいて、清水部長、山本部員らを中心として、発掘に、遺物の整理復原に極めて称讃に価する成果を上げた。この功績に対してセーラファンドを受賞したのであった。これは彼らの努力に対する当然の表彰といわべきである。

なおこの遺物は魚津市教育センターと西部中学校において保管される。

昭和42年

魚津市教育委員会

執筆　広田　寿三郎

大谷　清　瑞